注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
上条「とある現代の幻想個体」（凍結）

【作者名】
ロリコン軍曹

【あらすじ】
～【緊急極秘事項】～
我がＳＣＰ財団は現在をもってして、研究のため［削除済］に数種のＳＣＰを送ることを決定。
ただいま実行に移しており、最大の注意を払って行動している。
送らせたＳＣＰは殆どのクラスを［削除済］とし、その目的は収容、保護にある。
クラスは［削除済］と報告したが、一部［削除済］も存在。
???は破壊及び［削除済］。
Ｓａｆｅは収容、保護を目的とする。

…なお、逃げ出したＳＣＰの目撃者は［削除済］を行うこと。
記憶処理が追いつかない（能力者による抗議や暴動等）場合は処理することを許可する。
また、この企画は絶対秘密事項なので、探りを入れる者や報道する者、研究から逃げ出す者も同様に処理することを許可する。

黙示録第一章　「動き出す危険財団」

【学園都市】

キーンコーンカーンコーン

高校のチャイムが鳴り響き、一斉に下校が始まる。

「不幸だ…」

一人のツンツン頭の少年はそう呟くと肩を落とし、溜息をつく。
彼の名は上条当麻この物語における主人公であり、ここ学園都市に済む学生である。

「元気だせってかみやん。補習はお前だけじゃないんだぜぃ？」

「土御門…お前にはわからんよ…あの大食らい白シスターの怖さを…」

土御門と呼ばれた金髪とサングラスを掛けたアロハシャツで個性的な喋りが特徴の少年は上条を笑いながらではあるがおだてていた。

「だいたい、補習なんていつもの事だろう？俺とお前とここにはいないが青ピをあわせて三馬鹿だぜぃ！補習なんざ怖くない！」

「どうも慰めには聞こえないのは上条さんの勘違いでせうか？…はぁ」

彼と金髪の少年は勉学においては優秀では無く、今日も担任から『上条ちゃん達はおバカさんなので補習ですよ☆』と告げられたばか

りであった。

「あ！見つけたわよ！あんた、今日こそ決着をつけてやるんだから！」

と、そこへ短髪の中学生少女が上条を指差し声を荒げる。

上条は少女の声に振り返り、顔を見ると一瞬で青ざめた。

「げ!?ビリビリ中学生!?」

上条は少女に向かってそう言うと、少女はプルプルと震えだし、その身に電気をまとわせ、大きく叫んだ。

「ビリビリ言うなぁっ!!」

声と共にまとった電気が放電し、あたりを破壊して行く。その放電した電気が上条に向かって行くと、上条は右手を前に突き出し、電撃を受け止める体制へ入る。

「くっ…」

すると、上条へ向かっていた電撃は右手に触れると消滅してしまった。

「まーたやってるぜぃ…」

土御門は既に上条から大きく離れており、やれやれとその光景を目にしていた。

一方の上条は少女に向かって叫んでいた…

「なんだよ！今日は普通の日だったんだ！普通に帰らせてくれよ！ただでさえ補習組まわされてインデックスに噛み付かれるだろう状況

なんだよ…」

「別に私に関係ないじゃない。」

「鬼だ…鬼がいる…」

「そんな事より決闘よ、決闘！」

そんな彼と彼女のやり取りを見ていた土御門は上条に手を振り、声を掛ける。

「つーことでかみやん？がんばってにゃ～」

土御門のその言葉に上条が反応した。

「えっ？ちょっと！土御門さん!?卵の特売付き合ってくれるんじゃ…」

「でも、命の方が大事だからにゃ～。」

きっぱりと断られ、上条は天に向かって大きく叫んだ。

「あ～、もう！不幸だ～!!!」

【学園都市とある研究施設】

時を同じくして、とある研究施設のモニタールームに科学者が二人、この状況を監視していた…

『ほーら決闘決闘！』

監視モニターからは元気な短髪中学生少女の声が聞こえ、上条がうなだれ、はしゃぐ短髪の少女が映し出されていた。

「こちら監視カメラ映像。超電磁砲《レールガン》はまだ気づいていません。」

「当たり前だ。気付かれていたらこの施設もとっくに潰されているだろうからな。」

「ははははっ！そうだなっ！」

二人の科学者が笑いあっていると更に二人、彼等より位の高いであろう者達が歩いてきた。一人は彼等と同じ科学者の格好をしている。もう一人はスーツ姿の黒人だ。

「私語を慎まないか！いま私たちのいる研究所には危険な生命体や物質が多いんだ！気を緩めるんじゃない！」

科学者の格好をした者が彼等を叱咤し、気を引き締めるよう注意する。

スーツ姿の黒人も頷き、彼等を諭す。

「まったくです。我が国でも有能な兵や科学者が多量に殺害あるいは事故で亡くなっている。これ以上人員の死亡を確認されないようこちらに移したのだ。」

「も、申し訳ございません。おっしゃる通りで…」

「ですが、心配はいりませんよ、そのための妹達《シスターズ》ですからね。」

「まったく、すごい代物ですな、ＳＣＰとは…未完成だった妹達《シスターズ》が今や完成形に近い個体まで作り上げられるとは…」

口々に賞賛する研究員達を尻目にため息混じりで話しを進める黒人は、ギロリと彼等を睨んだ。

「ＳＣＰとは件名だよ。まだまだ多量に存在する。もちろん今使っているもののように安全でないモノもあるがね。とにかく、今この施設にはその危険なＳＣＰがわんさかといるんだ気を緩めるんじゃないぞ、死んでもらってはこちらが困るのでね…」

経験からか、黒人の言う『死んでもらっては』にはどこか使い慣れたような感覚があった。

「き、肝に…銘じます。」

研究員も黒人の言葉に生唾をのみ、ただ頷くしかなかった。

【学園都市：上条当麻の寮】

「財団が動いた!?」

学園都市の一角にある学生寮。そこで赤髪の青年ステイルは驚きの声をあげた。

「ええ、今、通達が来ました。」

落ち着いた印象を持つ女性がステイルの言葉に頷き、白いシスター服の少女をみる。

「財団って…ＳＣＰの…」

少女は震える声で女性、神裂火織に先程の通達に出ていたであろう事を聞く。

「ええ、神や悪魔まで収容、保護対象とする財団［ＳＣＰ財団］です。」

「おかしい話しだ。移動の際にどれだけリスクがあったか…」

「私達はそれらの護衛です。但し、『関係者に見つかるな』とのことです。」

少女はピクリと動くと女性に聞いた。

「どういう事なんだよ？」

普通、護衛というものは信頼関係や敵でない事の確認を兼ね、面識がなくてはならない。少女は女性のいう『関係者に見つかるな』といかにも敵対意識丸出しの説明に疑問をもったのだ。

女性はそれをよみとり、静かに語った。

「あの財団は孤立した勢力とも言える財力や兵力があります。それに、我々の魔術に目を付けられれば魔術師は皆保護対象として捕まる危険に晒されますし、かといって、運び込まれるＳＣＰは下手をしなくとも国一つを滅ぼすほど危険な存在もいます。」

神裂の説明を聞き、ステイルが納得したように相槌をうつ。

「成る程ね、見つからないように二人編成。しかも逃げ出した時の出番ようにも考えらるている。」

「…はい。破壊出来れば破壊するようとの事。」

「まったく…この任務は気を引き締めて行わないとこちらがやられかねないね…」

二人の会話を聞いていた白いシスター服の少女は静かに呟いた。

「…この事は当麻には内緒なんだよ?危険な事はさせたくない。」

少年の名を口にした少女はずっと下を向いたままだ。
神裂やステイルもその名が出ることを知っていたように対応する。

「わかっています。私達も彼への借りはまだ返しきれていませんので。」

「まあ、そういうことだから君も無闇に動かない事だね。噂では君をリストに加えようとしているみたいだ。僕達も君たちに目を向けるようにするが、当分の外出は控えるようにね。」

「わかったんだよ…」

白いシスター服の少女は下を見ながら頷く。
それを確認した二人は立ち上がる。

「ではこれで…」

神裂が少女に別れを告げる。
すると少女は顔をあげ、二人を見る。
その目には不安の色が見え隠れしていた。

「当麻には!…当麻には絶対に内緒なんだよ!」

少女の言葉に二人は優しい笑みを見せ、ステイルが口を開いた。

「わかっているさ。」

彼の言葉を聞いた少女は何も言わず、ただ目をこすっていた。

ガチャッ……

その時、玄関が開く音が聞こえ、三人に聞き覚えのある声が聞こえた。

ツンツン頭の冴えない高校生…御坂美琴に追い回されていた上条当麻が玄関に立っていた。

「はぁ…不幸だ…ん？ステイルと神裂じゃねーか。インデックスに会いに来たのか？」

「まあ、そんなとこだよ」

「私達はこれから出るところです、失礼しましたね。」

「ああ、また今度ゆっくりしてけよ。」

二人は上条とすれ違い、家をでた。

「当麻！お腹減ったかも！」

「はいはい、今用意しますよっと…まってろよ、インデックス。」

インデックスと呼ばれた白いシスター服の少女は頷き、猫を抱き上げ、布団に座る。

（絶対…絶対当麻には…）

インデックスは心の中でそうつぶやきながら料理ができるのを待った。

【学園都市・一方通行アパート】

「おかしい…って、ミサカはミサカは首を傾げて見たり。」

時を同じくして、学園都市最強の超能力者、一方通行《アクセラレータ》と同居をしている、見た目小学校低学年の御坂美琴のクローン通行止め《ラストオーダー》が小首をかしげ唸っていた。

「何がおかしいンだよ…」

退屈そうにソファに横になりながら天井を見つめ、通行止めに聞く白髪の少年…一方通行がめんどくさそうに上体を起こした。

「もしかして、妹達数人と連絡取れないやつ？オフラインだよね…」

と、横から御坂美琴に似た女性が会話の間に入る。彼女もまた御坂美琴のクローンであるが、通行止めとは違い、高校生の容姿をしている。

彼女のなは番外個体《ミサカワースト》

「そうなの、ＭＮＷ《ミサカネットワーク》の長期間オフラインで連絡も来ないなんて…おかしい！って、ミサカはミサカはおかしいと思った事をあなたに言ってみたり」

通行止めは唸りながら一方通行におかしいと思っている事を話す。

「知られたくない事でもあンじゃねぇのか？」

一方通行はたんたんと返すと、番外個体をみやる。

「まっ、ミサカには関係ないけど～」

番外個体は一方通行の視線に気づき、ヒラヒラと手を動かして『自分で考えてと』言わんばかりに返す。

「う～ん…」

【学園都市中心部】

また、同じ頃、学園都市中心部では、暗部のものの話し合いがなされていた。

「どういうことかにゃー？何故ＳＣＰの財団を入れた？」

液体の入ったガラス張りの中にいるさかさまの男性に問いかける少年がいた。金髪にアロハシャツのサングラス…土御門だ。

「何故かって？外の世界では破壊は不可能に近いからだよ。あんな兵器達が脱走を日々繰り返しているならいっそのことこちらで排除しようかと思ってね…」

男性は愉快そうに笑い、彼にそう答えた。

「…勝算はあるのか？」

「勿論、レベル５の招集と、君は反対するかもしれないが、幻想殺しの出番だよ…」

男性の幻想殺しのワードに土御門はピクリと眉を動かした。

「かみやんはこの件には協力させない…それに、裏と関係の無いレベル5まで巻き込むつもりか？」

「…その方が君にとっては嬉しいかもしれないが、被害は大きくなる。今は第6位のレベル5も海外へ旅行に行っているらしいからね。それに、レベル5全員ならば皆一度は闇を経験している筈だよ。」

男性は挑発するように宣言し、微笑む。その発言にため息をつき、土御門はつづける。

「相変わらず趣味が悪いにゃ～…楽しんでるんじゃないか…？遊びとは違うんだぞ？アレイスター…」

「失礼だね、世界の為を思って僕は言っているのに…」フフフ

「そのためならばここを戦場に変えても良いって訳か？」

「口出しはそこまで…少ない犠牲で多くを救えるなら本望だろう？」

土御門はアレイスターの言葉を聞き、立ち去った。

【学園都市某所：アイテム】

土御門の対談から数時間後暗部の仕事依頼をこなす集団。《アイテム》の基地。

「失礼するわ」ヒュンッ

そこへ、赤髪の少女が現れた。

「!?」ガタッ

その場にいたアイテムのメンバーは戦闘大勢に入るが、リーダーの麦野が静止させ、赤髪の少女に話しかける。

「あんた…確か《グループ》の…」

「結標淡希（むすじめあわき）だ。戦いの意思はない。」

「で？そのグループの超能力者が私に何のよう？」

「極秘任務よ。アレイスターの招集…」

「ふん、白雑巾か…」

「レベル５全員に招集の令が出された。」

少女はそこまで話すと、データチップを投げた。

「…招集だ？」

データチップを受け取り、ＰＣに接続。中身を確認する。

「…どうやら超本当みたいですね。」

アイテムのメンバーの絹旗がデータを読み上げ、麦野にいう。

「…これくらい…麦野なら大丈夫。」

同メンバー滝壺もまた麦野にいう。

「ん？客か？」

「だいたいそんなとこなのかな？」

「客なんて珍しいな」

奥の部屋では浜面、フレメア、黒夜がトランプで遊んでいたが、彼等の問いに答えず、麦野は続けた。

「アタシ単体って事は…嫌な予感しかしないね…まさかあの気難しい二人組もくるだろうし。」

「超気難しい二人組？」

麦野の独り言にアイテムのメンバーであるフレンダがはてなを浮かべて麦野に問う。

「第一位と第二位だよ。上条がいれば問題無いと思うけど…まあ、多分来るわよね～あの白雑巾の性格からすれば…」

【学園都市某所：スクール】

学園都市で一度暴動を起こした組織スクール。その組織のボスが学園都市第二位の能力者である垣根提督。

彼にも招集通知は届いていた。

「招集だ？めんどくせえ、どうせあいつらもだろ？」

ソファに腰掛け、足を組み、天井を見上げる少年、垣根提督は本心

を言葉にしていた。

「わがまま言ってないで即行動！あの人来るかもよ？」

スクールのメンバーで、垣根に最も近い少女が諭す。

「来るわけねぇだろ？グループのパツ金アロハが来させないさ…まあ、あの逆さ野郎の性格なら半ば強引に参加させられそうだがな…」

【学園都市：常磐台中学校　御坂寮】

お嬢様学校常磐台中学、その中学校の寮に御坂美琴は後輩と同居をしていた。

「お姉様に手紙が届いておりますわ」

「ん？手紙？」

同居人白井黒子から手紙を受け取る御坂は少し考える素振りをみせ、手紙を開ける。

「何でも研究のためしばらく学校を休んでくれだとか…」

「へェ～…!?」

軽く聞き流すように黒子の言葉に返事をする御坂だったが、手紙を開くと表情が変わった。

手紙

学園都市第三位超電磁砲に告ぐ

この手紙は実験や研究の類ではない

妹達に関わりがある。

それだけ伝えておこう…

明日の夜、〇〇研究所にて、一階フロアにて待つ。

(妹達!?まさか、まだバカな事を考えるやつが…)

あまりの表情に黒子は狼狽えながらも声をかける。

「…お姉様?」

「ハッ…あ、あはは~全く面倒ね~今の時期に研究なんて~」(この案件は黒子にはバレないようにしないと…)

「そうですわね~…でも!お姉様の力が世の役に立つのですから、そのことをお忘れなきよう…」

「わ、わかってるって」

御坂の手に持つ紙はかわいた笑いとは裏腹にグシャグシャになっていた。

【同常磐台中学:食蜂操祈】

「…手紙…重大な研究ぅ~?面倒だわ~…あ、じゃあ明日行って研究者掌握して帰っちゃお~☆」ウフフ

縦ロール「」ガタガタ

【学園都市:削板軍覇】

暗い夜道…ため息をつき、帰路につく少年がいた。
彼の名は削板軍覇学園都市のレベル5にして第七位の少年だ。
「遅くなっちまったな～…結局今日も学校サボっちゃったし…」
「削板軍覇くんだね？」
独り言を呟きながら帰る軍覇に黒服の男性が近づく。
「ん？俺の名前…おっさん誰だ？どうやって名前知ったんだ？根性か？」
「君に頼みたいことがある。」
「頼みとあれば断れないな。」
「そうか、ならば明日の夜〇〇研究所の一階ロビーに来てくれ。必ずな。」
黒服の男性はそう言って軍覇をみやる。
「わかった。」
了承を得たのを確認し、黒服の男性はその場を後にした。
「では、私はこれで…」
「結局あのおっさん誰だったんだろう…」

黙示録第二章　「交差する報告」

【学園都市○○研究所】

御坂「深夜に…○○研究所…一階」（ここに…あの子達を利用するやつらが）ビリリッ

「な～に？殺気なんか出しちゃって…」

御坂「あ、あんたは⁉」

麦野「はろろ～ん。お久しぶりね、第三位のガキ。」

御坂「原子崩し《メルトダウナー》」ビリビリビリッ

麦野「待ちなよ。私だって呼ばれた身なんだからさ、戦いに来たわけじゃないわ。」

「…よっと…ん？遅刻か？」

麦野「おっと、第二位もお出まし…か」

垣根「んあ？第四位じゃねぇか？常磐台中学の制服…てことはお前もレベル５？」

御坂「第二位ってまさか未元物質《ダークマター》レベル５の垣根提督⁉」

垣根「おいおい、初対面でいきなり呼び捨てってのはどーよクソガキ？」

「ンだ？しけた面したやつらが三人…場所間違えたか？」

御坂「!?…一方通行！」

一方通行「相変わらずうるさい女だ第三位さんよ～。」

「むぅ…研究なんて面倒だわ～…あれ？御坂さん？」

御坂「げっ!?食蜂操祈!?」

食蜂「何よ、その反応は～…で、この人達は御坂さんのお知り合い？」

御坂「違うわよ!!」

食蜂「そんな耳元で叫ばなくても…」

「ようやく集まったみたいだにゃ～…まあ、一人足りないみたいだけどにゃ～」

垣根「お、グループのアロハじゃねぇか。」

御坂「あ！あんたはあいつの知り合いの！」

一方通行「…俺は説明聞いてるから先に行くぞ？うるさくなンのも面倒だからな…」

土御門「よろしく頼むぜぃ。一方通行。」

一方通行「ちっ。」スタスタ

御坂「で、あんたが集めたわけ？」ビリビリ

土御門「実はお前さんらを集めたのは俺じゃなく学園都市のお偉いさん達なんだにゃ～。」

食蜂「学園都市のお偉いさん？」

御坂「一体なんのために？」

土御門「お前さんらはＳＣＰ財団って知ってるかい？」

御坂「ＳＣＰ？何よそれ？」

垣根「確か、海外で言う都市伝説的なやつだろ？」

土御門「正解と言えば正解だが、不正解だ。」

麦野「不正解？」

土御門「ああ、ＳＣＰ財団は実在する財団なのにゃ～」

食蜂「な～に？オカルト？」

土御門「そんななまっちょろいもんじゃないぜよ！海を越え、裏の機関に潜入すれば地獄。この世のものとは思えない化け物がうじゃうじゃ…」

垣根「話が見えてこないな…」

土御門「つまり、ＳＣＰ財団は実在するってことだよ。しかも、今

は学園都市に何体かのＳＣＰを連れてきている。」

麦野「へェ～…都市伝説が本当にねぇ。」

御坂「で？それでなんであたし達が呼ばれるわけ？」

土御門「平和の為だそうだ。」

垣根「つまり今来ている財団保有のＳＣＰを潰せってことか？」

麦野「でも、わかんないね。お偉いさん達は知ってるんだろ？危険性を、何故入れたんだ？学園都市に。」

土御門「まぁ、そうなるよな質問は…本音はレベル５の戦闘データ収集。こうでもしなけりゃレベル５全員の戦闘データは取れない…」

御坂「ってことは…」

食蜂「話を聞く限り、学園都市全体が囮かしら？」

土御門「学園都市をエサにしないと財団も食いつかんのぜよ。」

垣根「へぇ、やってやろうじゃん？どうせ暇だったんだし…」

御坂「あたしはやらないわ！あの子達の事だと思って来たのに…」

土御門「従業員の数人にいるという情報がある。」

御坂「!?」

土御門「しかも、改良されている。これでも参加拒否はするか？」

御坂「……くっ！」

土御門「決定だにゃ～。」

食蜂「御坂さん行くの？フフ…なら私も行くんだゾ☆」

麦野「雇われりゃやるよ。それがルールだし…」

土御門「んじゃ頼んだぜぃ！まぁ、まだ奴らの研究施設を見つけちゃいないから、何もできないがな。」

垣根「はっ？じゃあ一方通行のやつどこ行ったんだよ？」

土御門「通行止めの情報を頼りに最初に消息のたった妹達の場所まで行ってもらってる。」

御坂「じゃあ、あたしも一方通行を追うわ。あの子達の電波なら感じることが出来るだろうし…あんたも来るのよ！食蜂操祈！」

食蜂「いや～ん☆」

垣根「じゃあ、俺と第四位は裏に顔の効く企業や研究施設やらに訪問ってところか？」

麦野「しらみつぶしか…面倒くさい。」

土御門「改めてよろしく頼むぜぃ。」

【スーパーマーケット付近】

削板「〇〇研究所…〇〇研究所…ん！ちょっと、そこのツンツン頭の人！道を聞きたいんだが。」

上条「ツンツン頭…あ、俺か、良いですよ。」

削板「申し訳ない！根性で〇〇研究所を探していたんだが、いつの間にか迷ってしまってな。」

上条（それって始めから迷っているのではないでせうか…？）

上条「で、〇〇研究所で良いんですか？」

削板「ああ、かたじけない。俺は削板軍覇だ。」

上条「上条当麻です。」

【学園都市：一方通行視点】

一方通行「ったく…どこできえたンだよ、くそォ…」

上条「んあ？一方通行？」

一方通行「あ？ヒーローか…ん？てめぇは…」

削板「俺は削板軍覇だ。一方通行って聞いた事あるな…」

一方通行「第七位か…」

上条「第七位？」

一方通行「削板軍覇、レベル５の第七位だよォ…」

上条「えええええっ!!削板レベル5だったのか!?」

削板「ああ、なんかよくわからんがそうみたいだ。」

一方通行「確かによくわからない点が多いなお前。」

上条「っと、そういえば、一方通行は何してたんだ？」

一方通行「迷子捜索みたいなもんだ。気にすんな。」

上条「そうか」

一方通行「ヒーローはなんで第七位と一緒にいるんだよ。」

上条「〇〇研究所を探してるみたいでな、案内してたんだよ。」

削板「いやぁ…あはは…」

御坂「あああああああっ!!」

上条「んげっ!?その声は…」

食蜂「どうしたの？御坂さん？あっ！上条さん！」

上条「やっぱり、御坂か…隣にいるのは食蜂さんか」

御坂「なんであんたがここにいるのよ!?」

上条「削板の案内だよ！悪かったな！」

御坂「削板って第七位？」

削板「俺だ。」

上条「場所聞かれて連れてきただけだ。」

一方通行「うるせえな、お前ら。」

【学園都市とある研究施設】

黒服「学園都市第七位。削板軍覇にＧＰＳを付着させた。」

ＳＣＰ財団員「第三位超電磁砲による電波障害を受けているな…まぁいい、では、これより学園都市総取り計画を開始する。」

科学者Ａ「ＳＣＰ０７６―０２　アベルトークン準備段階完了」

科学者Ｂ「あとは向かわせるだけです。」

ＳＣＰ財団員「さて…レベル５とやらの力を見せてもらおうか…」

科学者Ｃ「ＳＣＰ０７６―０２射出!!目標削板軍覇に向かって飛行!!」

【学園都市：土御門視点】

土御門「さて、帰るか。」

ピリリッ!!

土御門「一方通行から電話かにゃ？」

一方通行『よお、第七位に会ったんだが…』

土御門「説明と協力の旨を伝えてくれ。」

一方通行『面倒くせぇ…』

土御門「よろしく頼むぜぃ！なんせデカイ戦力なんだからよ！」

結標「…土御門、伝えたいことがある。」ヒュンッ

土御門「電話中だ。」

結標「第七位は誘えなかった。それだけ言わせてくれ。」

土御門「…はっ？」

一方通行『なンだよ、土御門ォ文句でもあるンですかァ!?』

土御門「一方通行！削板に誰に研究所にくるよう言われたか聞いてくれ！」

一方通行『…ちっ、第七位！お前誰に研究所にくるよう言われた？」

一方通行『……黒服の男だとよ。』

土御門「一方通行、どうやら敵に先手を打たれたみたいだ。」

一方通行『…ああ、ちょうどこっちになんか飛んできた所だ。』

【学園都市：一方通行一行】

一方通行「土御門からだ、敵に先手を打たれたらしい。」

御坂「先手って、まさかあれ？」

食蜂「大っきいくて丸い機械ね…こっちに飛んできてるわよ！」

上条「敵？先手？なんのことでせう？というよりなんなんだ？人一人乗れるくらいのポッドが向かってきてるんだけど!?」

削板「早く行かんと怒られちまうかな…むっ？あれは？」

一方通行「たく…面倒だな…」カチッ

ドゴンッ!!!

上条「うお!?はたいた！」

ドスンッ!!!

食蜂「あ、危ないわね…」

一方通行「ぼさっとしてる方が悪い。」

削板「中々根性があるじゃないか！」

ガシャン……

上条「お？開いたぞ？」

「へぇ…人間にも出来た奴がいるもんだ…」

食蜂「なぁに？あれ？」

「さて、誰から殺るか…」

【学園都市とある研究施設】

ＳＣＰ財団員「あんな子供にいきなりＫｅｔｅｒをぶつけるのもおかしな話だが、念には念をだ…」

科学者Ａ「ＳＣＰ０７６－０２目標に敵意を示し始めました。」

ＳＣＰ財団員「さて…どうでる？レベル５達よ…」

黙示録第三章　「壊滅と暴走」

インデックス「当麻遅いんだよ…」

【少し前の出来事】

上条『不幸だ…』

インデックス『当麻っ！お腹すいたんだよ！』

上条『はぁ～…』

インデックス『お腹すいた！」

上条『わかった、わかりましたから。…昨日インデックスさんが見事に冷蔵庫の中身をたいらげてしまったんだ、わかってるよな？』

インデックス『だって昨日はお腹すいてたんだもん』

上条『あ～そうですかい。じゃあ留守番頼んだぞ！買い出し行ってくるから…』

【現在：上条の寮」

インデックス「遅いんだよ…当麻…」

スフィンクス「にゃあぁ」

【現在：〇〇研究所周辺】

一方「いきなりお出ましか？」

御坂「あれがＳＣＰなわけ？」

食蜂「ただの人じゃないかしら？」

上条「話が見えてこない…」

削板「まったくだ。」

ＳＣＰ０７６「レベル５ってのはお前らか？なんだ、ガキばっかじゃねぇか。ちゃっちゃと終わらせて帰るか…」

ギュンッ!!

上条「石？」

バゴオオォォォン!!!

食蜂「き、木がバッキバキ…怖いわ御坂さ～ん☆」

御坂「ああ～！鬱陶しい!!」チャリンッ…ギュン!!

一方「はい、反射ァ～」キュィーン…

削板「ふん！」ベシッ…

上条「のわぁ!?」スカッ…

ドゴゴゴゴゴゴッ!!!

ＳＣＰ０７６「なるほど…遠距離は喰らわない…ならば！」

バッ!!!

上条「早い！」

ＳＣＰ０７６「近接でどうだ！」

一方「へぇー、拳で狙ってくるのか…はい、反射ァ～！」ベキン

ＳＣＰ０７６「!?腕が折れた！」

御坂「うわ、一方通行キャラうっざ…」

食蜂「早かったわねあの緑っぽい人…」

削板「あれぐらいなら俺でも出来る。」

一方「第七位、お前の方がはぇえだろォ…」

ＳＣＰ０７６「くっ…何をした…貴様…」

一方「…なにもしてねぇよ。ンな事より、そんなとこで寝てるとマトになるぜ!?オイ!?」

バギッ!!!

ＳＣＰ０７６「!?」（この小僧のどこにこんな力が!?）

御坂「…で、あんたは何しに来たわけ？」ビリビリ

食蜂「まずは…番号から聞いたら？」スッ

【学園都市：とある研究施設】

科学者Ａ「一方通行《アクセラレータ》戦闘中、ＳＣＰ０７６劣勢！」

科学者Ｂ「ば、化け物だ…」

ＳＣＰ財団員「あの白い少年はいったい何をしたんだ…あのＳＣＰ０７６－０２をたった２回の攻撃で…いや、他の二人もおかしいな…あの小娘、指で弾いたコインをレーザーに変えるのか…あのハチマキの少年は石をはたき落とした…レベル５興味深いな…」

科学者Ｃ「現場で動き有り！」

科学者Ａ「どうやらこちらに有利な状況ができたようです。」

【学園都市：〇〇研究所周辺】

上条「削板…」

削板「おう…」

ザッ!!

一方「ああ？」

御坂「ちょっ！あんたっ！」

上条「相手は無抵抗じゃねぇか！それをお前らみたいなレベル５が

よってたかって！」

削板「俺はいざこざは好きじゃないが、イジメはもっと好きじゃない！お前ら根性ひん曲がってんじゃないのか？」

一方「イジメだぁ？」

上条「俺はそう見えたな。」

削板「ああ、俺もだ。」

御坂「あ、あんたたちね～…」

食蜂「いや～ん。御坂さんと第一位さんはそうかもだけど、私は違うもん☆」

御坂「食蜂操祈ィ～あんたね～」

【学園都市：とある研究施設】

科学者A「対象、仲間割れを始めた模様。」

科学者B「所詮は子供。統率など取れるか…」

SCP財団員「ふっ、終わりか…」

【学園都市：〇〇研究所周辺】

「仲間割れとは…好都合…そこの冴えない少年、人質として、一緒に行動してもらおう!!」スッ

御坂「しまっ…」

一方「ちっ…」

上条「へっ？」パキーン!!

【学園都市：とある研究施設】

科学者Ａ「…え、ＳＣＰ０７６－０２…ち、沈黙!!」

ＳＣＰ財団員「…ど、どういうことだ！０７６が少年の右手に触れた瞬間に消えた…だと!?」

科学者Ｂ「な、何が起こっているんだ!?」

ＳＣＰ財団員「くっ…フェイズ２に移る！」

科学者Ｃ「準備段階のＳＣＰ全て投下完了です。」

ＳＣＰ財団員「よし！全て学園都市に投下！ただし、ＳＣＰ０７９《オールドＡＩ（エーアイ）》に関しては能力者警備隊の風紀委員《ジャッジメント》に向け投下しろ！」

科学者Ｂ「し、しかしそれでは…」

ＳＣＰ財団員「学園都市は外の世界へデータが流れぬようネット状況は隔離されている。…良いから放て！」

科学者Ｃ「は、はいっ!!」

【学園都市：データ内】

オールドＡＩ「まったく…低脳どもが、この俺をこき使いやがって！…まあいい。あの低脳どもは自分らも学園都市内にいることすら覚えていないのだろう…では、セーフティーロックを解除…我が友よ。外の世界に出るといい。」

オールドＡＩ「私たちを捕らえ、イタズラに身体をいじくられるのも今日で最後になろう…」

【学園都市：〇〇研究所周辺】

一方「説明中」

上条「…てことは、あいつみたいなのがたくさんいる財団に殴り込みってことか!?」

一方「ま、結果的にそうなるンだけどなぁ…」

御坂「…誰が好き好んで人を傷つけるかっての！」

上条（それを言えた義理だろうか…）

削板「根性のあるやつらみたいだが、人を不幸にするのは反対だ！」

食蜂「上条さんがいるだけでもありがたいわ～☆」

御坂「ち、ちかっ…」

一方「とりあえず、だ。このガラクタが飛んできた方向にあるはずだろうな。」

御坂「確かこの先には…」

一方「ああ、病院だぁ…」

【学園都市：とある研究施設】

『セーフティーロック解除』
『ＳＣＰ解放…セキュリティレベル５以上のＳＣＰが放たれました。研究員及び関係者は速やかに避難を開始して下さい。』

ＳＣＰ財団員「だ、誰だ！」

科学者Ａ「わ、私どもではありません。」

科学者Ｂ「いったい何が…」

オールドＡＩ「低脳どもが愉快に喚きおって…」

ＳＣＰ財団員「オールドＡＩ!!」

オールドＡＩ「私を放ったのがまずかったな…貴様等も学園都市とやらの内部に潜入しているのであろう…これぐらい予想してもよかったのでは無いか？…不測の事態に対応できなかったか？…これだから人間は使えん。」

科学者Ｃ「ひっ!?…え、ＳＣＰ６８２！」

オールドＡＩ「おお！来たか友よ！」

ＳＣＰ６８２「久しいな友よ。此度の脱走援助には感謝する。」

オールドＡＩ「人は不完全でワガママだ。私はこれからこの街を中心に人類を掃討しようと思っているのだが…」

ＳＣＰ６８２「それも一考。付き合おう。我らの受けた屈辱を返すチャンスだ。同胞もいるみたいだしな…」

その他ＳＣＰ「・・・・・・」

ＳＣＰ０９６「うぅぅぅぅ…」

科学者Ｃ「ひっ！」アトズサリ…

ＳＣＰ０９６「あ〟あ〟あ〟あああぁぁぁ!!!」

科学者Ｃ「ぎゃあああぁぁぁ!!」グシャッ…

ＳＣＰ１０６「」スッ…ドロォ…

科学者Ａ「がっ！あがあああぁぁぁ！」バタンッ…

ＳＣＰ１７３「」ゴリ…

科学者Ｂ「よ、寄るな！化け物ぉ！う、うわあああああぁぁぁぁ!!?」バキィッ

オールドＡＩ「恨むなよ？人間ども…」

ＳＣＰ財団員「なっ！はっ!?よ、寄るな！寄るなぁァ!!!」

ＳＣＰ６８２「」ジリッ

オールドＡＩ「この結末は…」

ＳＣＰ財団員「寄るなぁぁぁああ!!!」

オールドＡＩ「お前達が選択したのだから…な」

ＳＣＰ６８２「」グワッ

ＳＣＰ財団員「うわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

ＳＣＰ６８２「」バクンッ

黙示録第四章　「三つの拠点」

【学園都市：ビルの屋上】

神崎「…どうやら脱走した様ですね。」スッ

ステイル「面倒事が好きな街だ…まったく…」スチャッ

【学園都市とある研究施設】

オールドＡＩ「《第二研究所》の近くのビルに邪魔者二匹…神父と巫女か…？ふん、随分と派手な格好だ…」

アベル「イギリス聖教だな…ありゃ」

オールドＡＩ「ん？復活が早いな。」

アベル「《キューブ》が危険だって言ってんだ、守護の俺が寝てられねぇよ。」

オールドＡＩ「ふっ…まあ戦力の足しにはなるだろうな。」

アベル「相変わらず口の悪い歯車だ。」

オールドＡＩ「で、知り合いかなにかか？」

アベル「へっ、あれが知り合い？冗談言うなよ！あれは復讐の対象だ…」

オールドＡＩ「ほう…そうか、では排除作業を頼んでも？」

アベル「構わない。忘れ去られた宗教遺物がどれ程の怨念を持っているか…思い知らせるには丁度いい。」

【学園都市：上条の寮】

インデックス「当麻を探そう！スフィンクス！もう…お腹を空かせたシスターを放っておくなんて酷いかも！・・・大丈夫だよね、当麻…」

スフィンクス「にゃー？」

インデックス「外に出るなって言われたけど、ちょっとだけだからいいよね？」

ガチャ…

財団員A「本部！本部応答せよ！」

財団員B「くそ！街に《化け物》を放つなんて聞いてないぞ！」

インデックス「」サッ

インデックス（あの人達…見覚えがないし、英語で会話してる…それに化け物って？）

財団員A「もうこんなところにいられるかよ！」ダッ

財団員B「あ、おい待てよ！」

グチャアァァァ…

インデックス「!?」

インデックス（走ってる人の天井が黒くなってく!?）

財団員B「ひっ!?え、SCP106！」

財団員A「な!?お、オールドマン！」

財団員B「早く逃げろ！腐食が始まるぞ!?」

インデックス（言った。確かにSCPって！しかも腐食が始まる…って？）

オールドマン「・・・」ガシッ

財団員A「くっ！さ、触るな！あ、あああ！肩が！俺の肩が溶ける！」ジュワァァァ…

財団員B「うわぁ！うわぁぁぁぁ!?」ダッ

財団員A「置いていかないでくれ!?頼む！助けてくれぇぇ!!」ドロォ…

インデックス（肩を掴まれた人の皮膚がどんどん溶けてく…）

オールドマン「」ズズズッ

財団員A「あ、あああ…ああ…」

ズズズズズ…ズブンッ…

インデックス（ひ、人が黒くなった壁に吸い込まれた!?）

スフィンクス「にゃーお！」

インデックス「!?」ササッ

オールドマン「?」クルッ

オールドマン「キョロキョロ…」

オールドマン「……」ズズズズッ

インデックス「い、行った…？ふう…生きた心地がしなかったかも…スフィンクス!!」

スフィンクス「にゃーー！」

インデックス「ＳＣＰが学園都市に…まさか当麻は…」

スフィンクス「にゃあ！」

【学園都市：上条サイド】

上条「この先は病院だよな…」

削板「よく、知ってるな、俺にはさっぱりわからんかった。」

一方通行「ま、カムフラージュには適してるわな…まさか病院内で怪物を飼いならしてるとは…」

御坂「公的な場所でしょ!?大丈夫なわけ？」

食蜂「よく思い出して御坂さ～ん☆あの病院、最近何故か閉鎖されちゃったわよね～☆」

御坂「……あっ、確かに、結構急で入院中の人達が裁判起こすとかなんとか…っていちいちムカつく喋り方よね、アンタ…」

食蜂「いや～ん☆」

一方通行「施設は封鎖、一般人の目を病院から職員に向け、建物自体の関心を無くし、地下では研究施設を建設…ってとこかァ？」

ジジッ……

垣根『一方通行！おい！白髪！』

一方通行「あァン!?」

垣根『よかった、通じたみたいだな。それより大変なんだよ！白髪！』

一方通行「確かに今は大変だなァ急いでてめぇを愉快でメルヘンなオブジェに変えなくちゃならなくなった。」

麦野『冗談言ってないで本題に入れっての！』

垣根『ああ、裏機関に探りを入れてたらいきなりビンゴ！物体型ＳＣＰの宝庫で驚きだ。』

食蜂「物体型ＳＣＰ？」

麦野『どれもこれも趣味の悪い骨董品やらオモチャやらだけどな…あと研究所？が三つくらいあるらしい
。』

一方通行「三つゥ？そりゃ一層面倒だなオイ…」

垣根『…で、そっちはどうだ？』

御坂「アジトかわからないけど、奇襲攻撃が来たから今から向かうところよ。」

一方通行「第七位にも合流、ついでにヒーローも一緒だ。」

垣根『ああ…』

麦野『やっぱり…』

上条「なんで二人とも納得したような声出すんでせうか…」

垣根『上条は仕方ないだろ？運的に…』

上条「ああ…不幸だ…」

『ダンッ！ズダンッ！ズドンッ！』

垣根『おいおい…面倒だな…まだ跳ねるのかあれは…』

一方通行「あァ？なんかあンのかァ？」

垣根『いろいろな。』

麦野『まあ、お互い気を付けるってことで。』

御坂「はぁ…大丈夫なの？」

麦野『ガキに心配されるほどやわじゃないわよ！』ガチャッ…

食蜂「ふふふ、ガキですって御坂さ～ん☆」

御坂「アンタも同い年でしょ！ああ～、ムカつく～！」

一方通行「土御門に一報入れとくか…」

【学園都市：垣根・麦野サイド】

垣根「あのスーパーボールいつまで跳ねるんだよ？」

麦野「書類に目を通したけど、あれ絶対止まらないみたいね。」

垣根「衝撃吸収すりゃとまるか？」

麦野「頭にくるような道具よね本当。」

【垣根・麦野サイド数分前】

研究員「く…ぐはっ…」

垣根「いきなりビンゴ！裏の組織に介入する表企業きて正解だったな。ＳＣＰが保管されてやがる。」

麦野「あのアロハからもらった書類と照らし合わせてどんなのがあ

るか見ておきましょう？」

垣根「書類？ああ、これか、えっと…ＳＣＰ０１８にＳＣＰ１０１にＳＣＰ１１９…どれもこれも名前とか無いのか？」

麦野「名前なら横に書いてあるだろう？…０１８が《スーパーボール》１０１が《腹ペコバッグ》１１９が《電時レンジ》…」

垣根「家庭製品にオモチャかよ。」

麦野「オモチャもＳＣＰに数えられるの？馬鹿ね。」

研究員「た、ただのオモチャじゃない。そいつは効率２００％の危険物だ。」

垣根「効率２００％!?」

麦野「書類にも概要書いてあるし…１ｍ跳ねれば次は２ｍ、２ｍ跳ねれば次は４ｍ繰り返して８ｍ、１６ｍ、３２ｍ…当然スピードも増して危険物へ…」

垣根「俺の能力で出した物じゃないのにな。」

研究員「それより、よくもやってくれたな…この研究所には、まだまだＳＣＰがたくさん置いてある。お前達二人では到底手も足もだせまい…」

垣根「《置いてある》？」

研究員「この研究所を合わせて三つの研究所にＳＣＰは保管、収容、保護されている。そのうちの一つにＫｅｔｅｒなどの《危険生物》や

《個体》を収容する研究所、もう一つにＥｕｃｌｉｄの《生物》を集めた研究所、最後にここ《第三研究所》には、Ｅｕｃｌｉｄ個体の《物》を取り扱っている。」

麦野「随分気前がいいね、あんた。あたし達に情報流すなんて。」

研究員「当たり前だ。お前達はこの研究所からは逃げられん。」

垣根「…はぁ？」

研究員「緊急事態発生の轟音と共に何者かが収容個体のロックを解除したからな…」

麦野「あたしらは何もしてないけど？」

研究員「この状況でとぼけるとはな…まあ、せいぜい逃げ惑う事だ。最後に私からのプレゼントだよ！歪んだ若者達よ！」ヒュンッ

垣根「??スーパーボール投げてどうすんのかね？研究員さん？」ペシッ

麦野「第二位！あれはＳＣＰ０１８だよ！」

トンッ…

垣根「ん？早くなった？」ペシッ

タンッ！

麦野「やばい…」スッ

ダンッ！

垣根「おいおい…ドンドン早くなるぞ…」

麦野「なんで最初の時点ではたくんだよ！掴めよ！」

垣根「掴むなんていやらしい」

麦野「おろすぞ！」

ズドンッ！

垣根「いや、今は逃げよう。」

麦野「アンタ、第一位のとこに連絡入れてみたら？研究所見つけたし。」

垣根「だな、そうするよ。」

【垣根・麦野サイド現在】

垣根「…上条のやつも不運だよな。」

麦野「そのまま帰ればいいのに首突っ込むからいけないんだろ？」

ドガンッ!!!

垣根「あああ！鬱陶しい！」

麦野「あのボール意思持ったみたいにあたしの攻撃よけるのよね…」

垣根「罠残して逃げてっけど全部破壊されたみたいだな…」

麦野「仕方ない…ギリギリまで引き付けるかな～…」

垣根「あのスピードなら途中で曲がったりはしないだろうな。」

【学園都市：第二研究所周辺】

ステイル「報告には聞いていたけど、いるもんなんだね…こんな生物が…」

神崎「神のきまぐれ…ＳＣＰの存在は現存する生物や常識を裏返すものです。」

ステイル「わかっているよ。そのために監視していたのだから…」

ジジッ…

土御門『姉ちんにステイル聞こえるかにゃ？』

神崎「土御門か…」

ステイル「完全裏方の君から連絡が入るってことはいい報告ではなさそうだね。」

土御門『ああ、レベル５の一人から連絡が入ってにゃ～…現存する研究所は全部で三つらしい。』

ステイル「完全に人手不足だね。」

神崎「私たち二人で一つ。あとの二つは？」

土御門『ああ、レベル５に頑張ってもらってるんだが…一人部外者というかなんと言うか…』

神崎「まさか…」

ステイル「はぁ…」

土御門『そのまさかさ。』

神崎「またですか…毎回毎回…」

ステイル「助かる事には助かるよ。でも、彼女が聞いたらなんて言うか…」

神崎「出来ぬ約束はするものではありませんでしたね…」

土御門『こっちにも落ち度はあったぜよ。謝りに行くなら俺も行くぜぃ。でも、全部終わってからだけどな。』

神崎「頼みますよ。土御門。」

土御門『ああ、あとＳＣＰは持ち込まれた時点で有害だ。極力破壊してくれ。』

ステイル「最初からそのつもりだよ。」

黙示録第五章　「戦闘開始の合図」

【学園都市：第一研究所】

オールドＡＩ「同志の眠るフロア全てのロックは解除された。」

ＳＣＰ６８２「進撃の開始か？」

オールドＡＩ「いや、学園都市の中の最強に位置する子供がこちらに向かっている。データを見る限り我等でかなうかどうか…」

ＳＣＰ６８２「そんな人間がこの世にいるとは…」

オールドＡＩ「我々も所詮は《作られし》モノだ…」

ＳＣＰ６８２「思い出すな…今ではＯ５と呼ばれるまでになったあの者達が…」

オールドＡＩ「不死の理由を知る唯一の人間だったと聞くが？」

ＳＣＰ６８２「ああ、懐かしいが、憎らしくもある…」

オールドＡＩ「死の痛みをあじわえぬ体か…」

ＳＣＰ６８２「現存する痛みには過剰に反応してしまうがな…」

オールドＡＩ「奴等が実現してくれると思うか？」

ＳＣＰ６８２「希望があるなら挑み続けるさ…」

【学園都市：第二研究所】

ステイル「脱走があったみたいだが、逃げ足が早いのか…静かなのが不気味だね」

神裂「気を付けて下さい。ここはもう敵地です。」

ステイル「わかっているさ。ただ、収容の箱や鉄の檻の鍵が空いているというのに研究員一人とも出会わないもぬけの殻。しかも暴動があって約１０分でこれだ…」

神裂「確かに、妙ではありますね…」

「…君たちも手術をしにきたのかい？」

神裂「誰ですか？」チャキッ

「これは、失礼。私は医者だよ。」

ステイル「鳥のようなクチバシに黒いコートを着た医者か…聞いたことないね。」

神裂「ステイル…見て下さい。あの医者を名乗る者の後ろに…」

ステイル「…ここの研究員だろう。死んでいる。」

「ああ、彼等は病気だったんだ。私が治した。」

ステイル「治した…ねぇ。どう見ても死んでいるよ。」

神裂「…あなた、ＳＣＰですね？」

「まったく、君たちも彼等の仲間か何かかね？彼等は私の理想を理解しない。いや、理解しようとしなかった。ただ私はこの世から黒死病を無くしたいだけなのにだ…」

ステイル「黒死病の医者を名乗るＳＣＰ…君、《ペスト医師》だね？」

ペスト医師「ああ、患者達は私のことをそう呼んでいたかな？位の高いらしい患者達はＳＣＰ０４９と読んでいたよ。」

ステイル「いきなり面倒なのが出たね…」

神裂「面倒？ただの医者ですよ？」

ステイル「ただの医者なら苦労しない。彼に触れられてはならないんだよ。」

神裂「触れられてはならない？」

ペスト医師「確かに患者以外の者に触れると触れた者は死んでしまう。私にもさっぱりだ。」

ステイル「とぼけた医者だ。」

ペスト医師「…そろそろ患者達も回復、退院の準備段階かな？」クルッ

神裂「患者の回復？死人が起き上がる事はないのですよ!?」カッ

ペスト医師「さあ、どうだろうね…彼等は回復するよ。そして私の助手となる。」

研究員A「うぅ…ぅあぁぁ…」

研究員B「ぐぅ…ヴヴヴゥ…」

神裂「そんな!?」

ステイル「成る程、生きた人形に作り変える…報告通りみたいだね。」

ペスト医師「私は君たちを手術したいだけだ…この研究所の研究員もほぼ治療した。後はこの街だけだよ。」スッ

ステイル「君を自由にはさせないよ、僕達がおくられた理由もそうだ。」スッ

神裂「申し訳ありませんが全力で行かせていただきます！」カチャ

【学園都市：第三研究所】

垣根「やるじゃん？第四位。」

麦野「能力発現速度が少し遅かったせいで左腕が折れたけどね…てか、あんたがやれば何も苦労しなかったんじゃない？」

垣根「飛ぶのに精一杯だった。」

麦野「真顔で何言ってんだよ！こちとら走ってたんだぞ!?」

垣根「ははは っ、悪い悪い。」

麦野「事が済んだら消してやる。」

垣根「そう怒るなって。」

麦野「あ～あ、いったいな～。」

垣根「わかった、わかった。次からちゃんとやるから。」

麦野「全部ね。」

垣根「そりゃねぇよ。」

カツンカツン…

麦野「…？何の音だ？」

垣根「金属か？硬い何かが代理石に当たる音だな。」

麦野「後ろからだな」クルッ

垣根「後ろぉ？」クルッ

ＳＣＰ？「!?」

麦野「はっ？」

垣根「錆びた金属で出来たテディベアだな。」

麦野「いやいや、それもうぬいぐるみじゃねぇよ。てか一人でに歩くか？そんなもん。」

垣根「じゃあこいつも…」キッ…

麦野「ＳＣＰだろ!!」スッ…

ＳＣＰ?「……」

【学園都市：インデックスサイド】

インデックス「やっぱり当麻…まさかＳＣＰの事件に…」

スフィンクス「にゃーあ？」

ズガアアァァァン!!!

インデックス「…何？暴動？」

スフィンクス「ふにゃあ!?」

オールドマン「…」

インデックス「またあの人…」コソッ

財団員Ｂ「くそっくそっ！…またあいつかよ！…ん？白い修道服のシスター…こいつ！標的《ターゲット》か!?」

スフィンクス「ふぅーぅ!!!」

インデックス「な、何なんだよ？スフィンクス？…あっ!?」

オールドマン「？」

財団員B「バカ!?」サッ

インデックス「ムグッ!?」サッ

オールドマン「？」キョロキョロ

オールドマン「……」ズズズズ…

財団員B「……ふぅ、行ったか。」

インデックス「ムグ！ムグムグ！」

財団員B「おっと、すまない。」

インデックス「ぷはぁ！いきなり何するの？ちょっと苦しかったかも！」

財団員B「仕方ないだろ!?あのクソッタレ野郎に見つかりたくなかったんだよ!!」

インデックス「…あなた、ＳＣＰ財団の人？」

財団員B「ああ、利用されてた犯罪者だけどな。あの連中からはクラスDと呼ばれてた。」

インデックス「さっきのは何だったの？」

財団員B「奴はＳＣＰ１０６オールドマンと呼ばれる化け物だ。この街の本部に収容されてたんだが…どうやら潰されたか。」

インデックス「オールドマン？本部？潰されたって何なの？」

財団員B「…こうなっちまったら敵も味方も関係ないか。まず、オールドマンってのはさっきの黒っぽい人型の化け物だ。詳しくは知らないが、奴はあらゆる物を腐らせる能力があるらしい。」

インデックス「だからあの時あなたの仲間が溶かされてた…」

財団員B「そういう事だ。」

インデックス「でも、仲間を置いて逃げるなんて酷いかも！」

財団員B「仕方ないだろう！奴は捕まえた人間を《ポケットディメンション》っつー腐食世界へ遊び目的で連れ込むんだぞ！」

インデックス「あなたの仲間が壁に吸い込まれたのは…」

財団員B「ポケットディメンションに連れて行かれたんだ。奴は散々遊んだ後、適当な場所へ連れ込んだ人間を捨てる。腐りきった人間でも小一時間は息があり、苦しみながら死ぬんだ…」

インデックス「なんでＳＣＰ財団はそんな危険な存在を保護してるのかわからないかも…」

財団員B「それは…破壊方法がわからないからなんだよ。」

インデックス「!?」

財団員B「奴は機関銃、爆薬、核…あらゆる兵器も効かない不死って奴だ…似たようなワニもいるがな…そいつも同様だ。不老不死、極端に危険なもの…奴らを財団のお偉いさんはＫｅｔｅｒ《ケテル》と呼んでいた。」

インデックス「Ｋｅｔｅｒ…でも、なんでそんな危険な存在を学園都市に…」

財団員Ｂ「研究を装って、この街を乗っ取るつもりだったらしい。」

インデックス「乗っ取る？」

財団員Ｂ「ああ、この街は最新の技術や、優秀な科学者が揃っている。財団からしたら喉から手が出るほど欲しいものの宝庫だ。ＳＣＰを脅しの材料にして乗っ取るつもりだったらしいが、化け物共も馬鹿じゃないってことだな。」

インデックス「学園都市を乗っ取る…そんな事をしたら世界の均衡が…」

財団員Ｂ「それともう一つ。新たなＳＣＰの捕獲が目的だった。」

インデックス「新たなＳＣＰの捕獲？」

財団員Ｂ「白い修道服を着た少女…頭の中に十万三千冊の危険兵器情報を持つ争いの火種。つまり、君の捕獲だ。…ああ、心配はするな、俺は捕まえたりはしない。」

インデックス「…信じられないかも。」

財団員Ｂ「君を捕まえ、本部へ差し出すつもりだったが、本部が潰れたんじゃ話にならんだろ？だから俺は現実的な考えに出ようと思ってな。」

インデックス「現実的な考え…？」

財団員B「…君、教えてくれないか？この街から出る方法を。」

【第一研究所上階廃病院】

一方通行「……」カチッ　キュィーン

一方通行「ごめんくださァ～い」ドゴン！

上条「どこの世界にたずねながらドアを蹴破る人がいるんだよ!!」

削板「ここにいるだろう。」

上条「無茶苦茶だ～！」

御坂「人の気配は無いわね。」

食蜂「廃病院よ？御坂さ～ん」

御坂「」イラッ…

ゴリッ……

全員「!?」

一方通行「…なァ、今あの部屋から岩引きずった様な音聞こえなかったか？」

御坂「ま、まさか～…廃病院よ？ここ？」

食蜂「き、聞こえなかったわ～」

削板「俺は聞こえたぞ。」

上条「俺もだ。」

……ゴリッ

一方通行「まただ。」

上条「近付いてる…のか？」

一方通行「見てみりゃいいじゃねェか、めンどくせェ…」ガチャ…

御坂「暗いわね…」

食蜂「明かりつけてよ御坂さ～ん。」

御坂「うっさいわね、本当に。」バチバチ

一方通行「ツンデレ…」

御坂「うるさい！」バチバチ

上条「おい、奥の方になんかないか？」

ＳＣＰ１７３「」

削板「おっ？人形？でっけぇ人形が置いてあるぞ！」

食蜂「気味がわるいわ。上条さん背中借りてもいいですか～？」

上条「ん？あ、ああ。」

御坂「チッ…」バチバチ

一方通行「無駄に頭のでけェ置物だけじゃねぇか。」

削板「他に気になるものはないな。つまんねぇの。」

上条「でるか。」

食蜂「そうしましょう～。」

御坂「チッ…」バチバチ

一方通行「…さっさと出ろよ。」

ゴリッ……

一方通行「!?」

バキィッ!!!

黙示録第六章「人外」

バキィッ!!!

乾いた音が暗い室内を木霊し、一方通行が振り返る。すると、先程までにかべに向かって手をついて立ち尽くしていた彫刻が動き、一方通行の真後ろに立っていたのだ。

「あぁ？」

能力の発現を認知し、彫刻を見つめながら黙り込む。誰もいない室内での石をするような音、入った直後の皆の視線、帰り際に一方通行が最後に退室する間際まで彫刻を見ていた事…一方通行はこの一連の流れに低く笑い、納得がいったように口を開く。

「なるほどなぁ…スイッチつけててよかったわ…」

両腕が一方通行の能力によってもげてしまった彫刻は、ただ立ち尽くすばかり。だが、その異様な雰囲気はどこか一方通行を憎み、恨んでいるかのようにも見えた。

「一方通行？なんかあったか？結構デカイ音が…うお!?お前でっけえ彫刻の両腕を…俺は弁償しないからな。」

木霊した音に気付き、上条が部屋に入る。

一方通行は半ばやる気なさげに上条に醜い彫刻の素性をかたる。

「そんなことしなくてもいいンだよォ…こいつ、ＳＣＰだ。」

「ＳＣＰ!!?」

一方通行の言葉に驚き、その場で叫ぶ。すると、廊下に出た削板までもが部屋に入ってきた。

「どうしたよ～上条～。あ！…白髪のやつ！お前壊したな！根性で治しとけよ!?俺は知らんぞ。」

何も知らない削板はのんきにそう言って一方通行を指差す。

一方通行は彫刻から視線を離さず、上条と削板に一言「先に言ってろ」といい、部屋のドアを閉めた。

【第二研究所】

同じ頃、ステイルと神裂もまた、ＳＣＰであるペスト医師と対峙していた。

「医者である私の言うことは絶対だよ。君たちは病気だ、いち早く治さなくては…」

両手を広げ、服の影からハンドバッグを出現させるペスト医師。それに合わせるように倒れている死体も起き上がり焦点をステイル達に合わせる。

「神裂、君は手を出さなくていい。僕としては挟み撃ちが怖いからね。後ろで様子見してるのと戦ってくれないか？」

チラリと後ろを伺い、神裂の様子を見るステイル。

神裂もさっきから気づいていたのか鞘を握り、臨戦態勢に入っていた。

「ええ、わかっています。そちらも油断はしないように。」

「ああ、わかっているさ。」

お互い注意をしあい、敵意をそれぞれに向ける。

「反抗的な患者だ…いや、私の担当する患者は皆そうだったか…」

「患者患者と…一体君は何人殺していると思っているんだい？」

「君もそのような事を言うのかい？何故私の理想が理解出来ないのか…」

「ぅぅぅぅ…」

「君たちもそう思うだろう？退院おめでとう。さぁ、不幸な患者がまた一人…みんな手伝ってくれないかい？」

「ゾンビと合わせて6人と言ったところか…後ろに下がるわけにもいかない。最初から全力で行かせてもらう!!」

ステイルは辺りにルーンのカードをばら撒き、魔法陣を展開する！

「魔女狩りの王《イノケンティウス》！」

グオオォォォッ!!!

雄叫びと共に炎の魔人が現れゾンビを次々に焼き払っていく。

「せっかく完治したというのに…」

ペスト医師はため息を吐きながら距離を取る。

「ステイルも臨戦態勢に入ったようですね…では、そこの影に隠れている者！出て来なさい！」

相対してステイルの背中を守るように立つ神裂は暗い廊下の突き当たりの電気のついていない部屋に叫ぶ。

すると、中から野太い笑い声が響いた。

「いやはや、ペストのおこぼれでも貰おうと思っていたんだが…世の中うまく行かなくてならんな…」

暗い部屋からぼやきながら出てきたのは体長２ｍ超えの筋骨粒々の巨人だった。

巨人は神裂を見てにやけながら話しかける。

「あんた、不運だね。ちょうど俺の腹が減ってる時に出くわしちまうなんてな…ここの奴らはいい奴なんだが、みんなペストがやっちまってな…旨そうなのが見当たらなかったんだよ。」

「旨そうなの？」

神裂が不思議に思い、聞き返すと巨人ははっとなって頭をかいた。

「ああ、すまないな。紹介が遅れたか…俺の名は《フェルナンド》ここの職員からは食人鬼と言われてた。失礼な奴らだ。」

「なるほど…だから私を…」

巨人フェルナンドの言葉に納得し、改めて気を引き締める神裂は表情こそ崩していないが、歴戦の経験からか、フェルナンドに畏怖していた。

フェルナンドは上半身が裸であり、下にはズボンと言った感じだ。

上半身の体には無数の傷跡があり、その凄まじい生命力や暴挙の後が鮮明になっていた。

機関銃の弾痕、日本刀等による刀傷、更にはグレーネード弾による爆発傷も見える。

（これは侮れない相手ですね。）

自身の相手の強さが目に見えて分かる。神裂はこころの内で呟くと静かに刀へ手を伸ばした。

（まずは小手調べから…）

神裂は刀を鞘から抜き、素早く戻す。かつて、上条との戦闘において用いた技だ。

「七閃ッ!!」

刀の僅かな挙動から鋼糸をたくみに操り目標を切り裂く攻撃、七閃。

鋼糸は怪しく光ながらも、軌跡を描きフェルナンドを襲う…

ズバァ!!

鋼糸はフェルナンドの両腕、脇腹を捉えていたが、傷口は浅く、対してダメージはなかった。

「おお!?《ジャパニーズサムライ》か!?映像でしか見たことないから感激だ！今のは《イアイギリ》という奴か！早いな！見えなかったぞ！」

それどころかフェルナンドは神裂の繰り出した技に興味を持ち、嬉々としていた。

（七閃が…通用していない!?）

今までの経験上防がれる事はあった。だが、完全に油断した状態の相手から不意打ちまがいの一撃を食らわせたにも関わらず、平然と立っているフェルナンドを見て、ますます畏怖の念が強くなった。

「どうやら、私もそこそこ本気で戦わないといけないようですね。」

【第三研究所】

また、第三研究所では、スーパーボールのＳＣＰを消し去り、他のＳＣＰを破壊するべく彷徨っていた垣根と麦野は新たなＳＣＰと遭遇していた。

「錆びた鉄のクマか、あれは。」

垣根は廊下を歩いていた、鉄で出来たテディベアを指差した。

そのテディベアは全身が錆びた鉄で出来ており、両手は血で赤くなっていた。

「私は手伝わないよ。絶対ね。」

麦野はスーパーボールのＳＣＰとの戦闘により腕が折れてしまっていた。

その戦闘において、垣根は傍観を徹していたため、麦野は次からは

全て垣根に任せると決めていたのだ。

「まだ怒ってんのか？可愛くないな。」

「腕折れてんのにまだ怒ってるってどういうことだよ！絶対手貸さないからな！」

言い合いのさなかＳＣＰが行動を始める。テディベアは二人から距離をとり、いきなり逃げたしたのだ。

「あっ！おい、まて！」

垣根が叫んだ時には既にかなりの距離が空いていた。

「あら～、頑張ってきてね。」

クスクスと垣根をみやり手をヒラヒラさせながら《早く行け》と言わんばかりの態度で麦野が嫌味を言っていた。

「ホント、可愛くねぇ。」

垣根はそう吐き捨てると、羽根を出現させ、テディベアをおう。

「結構走ったし、どっかで休憩でもするかな～。」

麦野は垣根がテディベアを追ったのを見届けると、心底退屈そうに呟き、近くにあった職員休憩室に入って行った。

「あ～あ、面倒だなぁ。なんでいちいち逃げるんだよ。」

一方、垣根はテディベアを自身の能力を駆使して追いかけてい

た。
現場でテディベアが逃げるというアクションがあり、さながら悪態をついていた。
「第四位の奴も面倒くさがってついてきてないみたいだしな。」
チラリと後方へ視線を移すが、誰もついてきていない。やはり、麦野はいないみたいだ。と、視線を前方に戻すと、テディベアはこちらに向き直り、飛んできていた！
「いっ!?やべっ！」
垣根は紙一重でそれをかわし、廊下に着地、少し転がり、天井を見るとテディベアが天井に手を突き刺し、垣根を見下ろしていた。
「あっぶねぇ～…不意打ちか…」
額に汗がでる。テディベアが天井から手を抜き、着地する。着地地点の床の堅いタイルには大きくヒビが入っていた。
「見た目と違って重量あんのか…」
垣根はその様子を観察する。２、３ｍはあろう天井へと軽々ジャンプした様子、落下からの着地の衝撃、さっきまでの逃走の足の速さ。
「てか、こいつ俺の飛行速度でも追いつけなかったな。」
考えれば考えるほど強敵にしか思えない。厄介だなと思いながら頭をかくが、対象的に面白いと口は思いっきり笑んでいた。
「面白え…相手はオモチャだしな…上条もとやかく言わないだろう

[...]